

なが やま ばる
永 山 原 遺 跡

霧島南部2期地区広域農道建設工事に伴う発掘調査報告書

1994

宮崎県教育委員会

なが やま ばる
永 山 原 遺 跡

霧島南部2期地区広域農道建設工事に伴う発掘調査報告書

1994

宮崎県教育委員会

序

この報告書は、霧島南部2期地区広域農道建設工事に伴い、宮崎県教育委員会が実施した高城町大字大井手に所在する永山原遺跡の発掘調査の記録であります。

今回の調査では、縄文時代から中世にかけての各時代におよぶ数多くの貴重な資料を得ることができました。

本書が学術資料だけでなく、社会教育や学校教育の場で活用され、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解の一助となることを期待します。

なお、調査にあたってご協力いただいた地元の方々、および、北諸県農林振興局、高城町教育委員会に厚く御礼を申し上げます。

平成6年3月

宮崎県教育委員会

教育長 高山 義孝

例 言

1. 本書は、宮崎県農林水産部北諸県農林振興局が行った霧島南部2期地区広域農道建設工事に伴い、宮崎県教育委員会が実施した永山原遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は昭和60年11月19日から12月17日に実施した。
3. 永山原遺跡は北諸県郡高城町大字大井手字小杉3345番地ほかに所在する。
4. 本書に使用した位置図は、国土地理院発行の2万5千分の1の地図をもとに作成し、周辺地形図については、高城町作成の5千分の1の地図をもとに作成した。
5. 遺物・図面の整理は宮崎県総合博物館埋蔵文化財センターでおこない、遺物の実測・拓本・製図等は永友良典のほか、整理補助員の協力を得た。
6. 本書に使用した写真は永友が撮影した。
7. 本書の執筆・編集は永友が行った。
8. 土器の色調は農林省農林水産技術会事務局監修の標準土色帖による。本書の方位は磁北である。また、レベルは海拔絶対高である。
9. 遺物は宮崎県総合博物館埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	1
第3節 遺跡の環境	4
第2章 調査の概要	6
第1節 調査の経過	6
第2節 層序	6
第3章 調査の記録	9
第1節 縄文時代の遺構と遺物	9
第2節 弥生時代の遺構と遺物	16
第3節 古墳時代の遺構と遺物	22
第4節 古代～中世の遺構と遺物	23
第5節 その他の時代と時期不明な遺構と遺物	28
第4章 まとめ	31

挿 図 目 次

第1図 試掘トレンチ配置図	2
第2図 位置図	3
第3図 地形図	5
第4図 グリッド配置図	7
第5図 土層図	8
第6図 SC7・SC8・SC9遺構実測図	9
第7図 遺構分布図	11～12
第8図 縄文土器実測図(1)	14
第9図 縄文土器実測図(2)	15
第10図 縄文土器実測図(3)	16
第11図 SC6遺構・遺物実測図	17
第12図 弥生土器実測図(1)	18
第13図 弥生土器実測図(2)	19

第14図	弥生土器実測図(3).....	20
第15図	弥生土器実測図(4).....	21
第16図	須恵器実測図.....	22
第17図	SB1遺構実測図.....	24
第18図	SB2・SB3遺構実測図.....	25
第19図	土師器実測図.....	26
第20図	陶磁器実測図.....	27
第21図	SC1遺構・遺物実測図.....	29
第22図	SC2・SC3・SC4遺構実測図.....	30

図 版 目 次

図版 1	永山原遺跡全景(表土剥ぎ時) / 調査区北端(土層堆積状況).....	33
図版 2	遺構確認状況(調査区南) / 遺構確認状況(調査区北側).....	34
図版 3	遺構検出状況(調査区南) / 遺構検出状況(調査区北側).....	35
図版 4	SB-3検出状況 / SB-2検出状況.....	36
図版 5	SC-8・SC-9検出状況 / SC-1検出状況.....	37
図版 6	SC-4検出状況 / SC-2検出状況.....	38
図版 7	SE-1検出状況 / SE-2検出状況.....	39
図版 8	縄文土器(1).....	40
図版 9	縄文土器(2).....	41
図版10	縄文土器(3).....	42
図版11	縄文土器(4)台付浅鉢.....	43
図版12	弥生土器(1)甕・壺・ミニチュア土器など.....	44
図版13	弥生土器(2)口縁部.....	45
図版14	弥生土器(3)底部.....	46
図版15	弥生土器(4)高坏.....	47
図版16	須恵器・土師器坏・陶磁器.....	48
図版17	土師器高台付塊・土師器坏(1).....	49
図版18	土師器坏(2).....	50

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

宮崎県農林水産部北諸県農林振興局では昭和48年から霧島南部地区を巡る広域農道の建設事業を推進していたが埋蔵文化財の取り扱い等については照会や協議が行われなまま事業が進行していた。このうち高城町大井手を起点として都市庄内までの約13.6kmの区間は霧島南部2期地区広域農道建設工区として昭和50年から工事が進められていた。水山原遺跡の所在する高城町小杉地区一帯の畑地には以前から土器片の散布が見られていたが昭和40年前半に耕地整理が行われていることから工事計画が進められていた。しかし、県文化課では埋蔵文化財の取り扱いについての協議が必要である旨を北諸県農林振興局に申し出、試掘調査を実施した。試掘調査の結果、縄文土器、弥生土器、中世土師器等の遺物をはじめ縄文時代と中世の遺構を検出した。そのため、遺跡の取り扱いについて協議を進めたが現状での保存が困難であるため記録保存のための発掘調査の措置をとることとして諸手続きを行った。

調査は北諸県農林振興局からの依頼を受けて県教育委員会が昭和60年11月19日から12月17日までの間実施した。

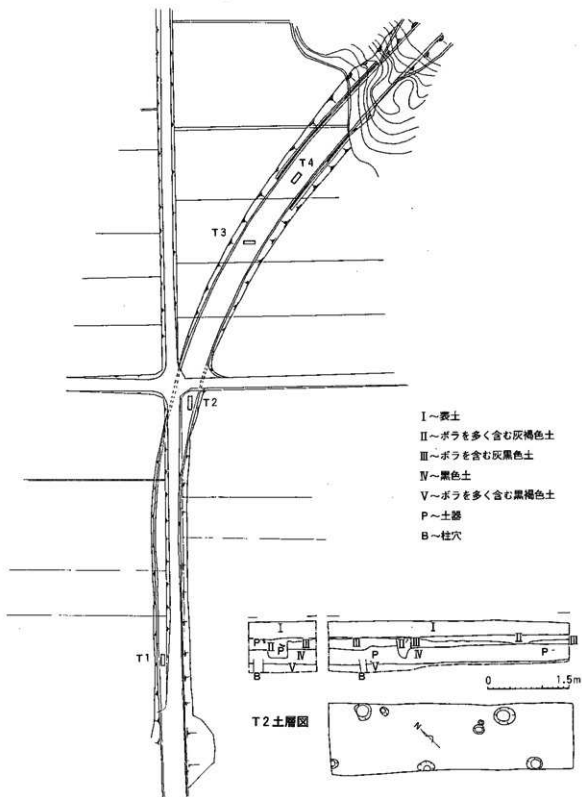
第2節 調査の組織

水山原遺跡の発掘調査組織は次のとおりである。

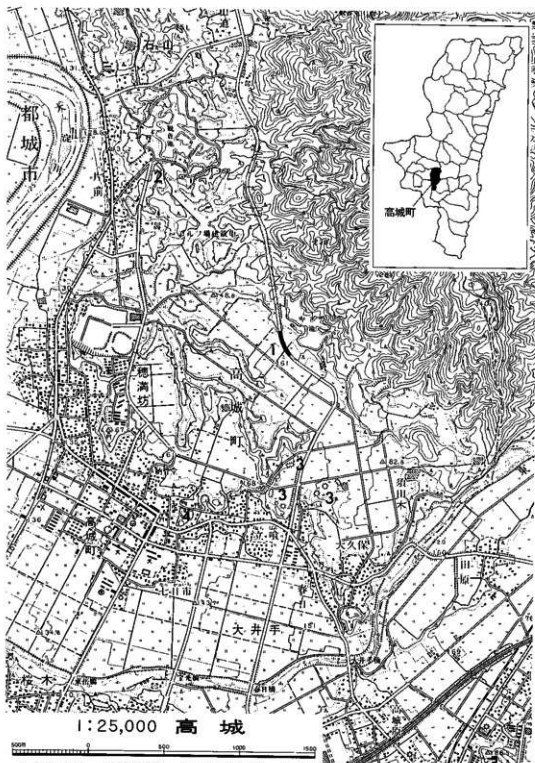
調査主体 宮崎県教育委員会

教 育 長	船木 哲
教 育 次 長	村田 綜
教 育 次 長	児玉 郁夫
文化課課長	永井 初志
課長補佐	成見 実
庶務係長	日高 達男
主 事	井野 伸一
埋蔵文化財係長	田中 茂
主任主事	面高 哲郎 (試掘担当)
主任主事	永友 良典 (調査担当)

調査協力 宮崎県北諸県農林振興局
高城町教育委員会



第1図 試掘トレンチ配置図



第2図 位置図

第3節 遺跡の環境

永山原遺跡は北諸県郡高城町大字大井手宇小杉3345番地ほかに所在する。

高城町は宮崎県の南西部に位置し、都城盆地の北部にあたる。西側の町境を大淀川が北流し、町域は大淀川右岸に南北に細長く延びる。東部から北部にかけて青井岳山麓が延び、南西部から南部にかけて平地が開け、町の市街地が広がる。

永山原遺跡は高城町の南西の端、大淀川とその支流東岳川が合流する地点に広がる平地の東に突出した台地上に位置する。台地は北西～南東に細長く延びる標高約150mの台地で、平地との比高差約20mである。台地の下には平地が広がり市街地が形成される。北部には青井岳山麓が迫る。台地の北側には丘陵地との間に開削谷が大きく入り込み、溜め池が数か所形成されている。

周辺には城ヶ尾遺跡、牧ノ原古墳群、月山日和城跡などの縄文時代から中世にかけての遺跡が立地する。

城ヶ尾遺跡は永山原遺跡の北西約1kmの独立丘陵上に立地する遺跡で、昭和62年と平成2年に発掘調査がなされ弥生時代後期と平安時代を中心とする遺跡が確認された。弥生時代後期では重弧文の長頸壺とともに堅穴住居3軒（花びら型住居跡）・土壇8基が検出され集落の一端が伺えた。平安時代では掘立柱建物1棟が検出されたほか、縄文時代の遺物として、御池ボラの下層から前期の曾畑式土器、上層から後期後半の市米式土器・草野式土器、晩期の黒色磨研土器・刻目突帯文土器なども出土した。

牧ノ原古墳群は永山原遺跡の南700m～800mの同台地上に分布する町内の中心的な古墳群で前方後円墳3基・円墳10基・地下式横穴1基・箱式石棺4基からなる6世紀代の古墳群である。このうち、前方後円墳3基はそれぞれ1号墳が全長50.1m、3号墳が全長38.6m、6号墳が全長45.4mを測る。3号墳は帆立貝式を呈する。円墳のうち2号墳が径31.2m、11号墳が径40mを測る大型の円墳で他は10m～15mの小円墳である。箱式石棺は昭和42年・43年に調査され、1基が13号円墳で検出されたほかは古墳の周辺で検出されている。地下式横穴墓1基にも古墳群内に分布し、平入り楕円形プランの玄室の地下式横穴墓で剣と鉄鏃1本副葬されていた。

牧ノ原古墳群以外の町内の古墳の分布は南西部の石山地区に円墳10数基が点在する。また、地下式横穴墓は北部の四家地区に雀ヶ野地下式横穴墓（1基）、南西部の石山地区の香禪寺地下式横穴（1基）が分布する。なお、香禪寺地下式横穴墓では地下式板石積石室墓が1基調査されており地下式横穴墓と混在する。地下式板石積石室墓の分布の東限として注目される。

永山原遺跡とは開削谷を隔てた南西約1kmの丘陵先端に中世山城である月山日和城跡も位置する。



第3圖 地形圖 (1/10,000)

第2章 調査の概要

第1節 調査の経過

発掘調査は工事区延長200mのうち、試掘調査で遺構・遺物の確認された北側を対象に実施したもので、調査面積は道路予定地の幅約8m、長さ約110m約800㎡を測る。なお、調査区の南側に一部かかる現道部分は調査から除外した。

調査区はほぼ南北に延び西に少し張り出す弓なりの形状を呈し、北端へ自然地形で傾斜する。

調査グリッドを10mピッチで打たれた工食用測量杭（北から37-4-1、36-4-1、35-4-2）を利用し、北から1,2,3,4, …, 10, 11区とした。

調査は試掘調査で包含層の深さを確認していたかから表土を重機で除去作業を行った。表土より下位層は人手による除去作業をおこない黒色土～黒褐色土まで掘り下げをおこなった。黒色土を中心に縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器等の遺物が出土した。御池ボラ上面で遺構の検出をおこない溝状遺構、柱穴群、土壌と思われる黒色土の落込みが確認された。

調査区北側の1～4区については遺構調査後、御池ボラ層を除去し下位層の確認をおこなった。

第2節 層序

当地は昭和40年前半、耕地整理が実施されているため、相当の攪乱がみられた。基本層序は次のとおりである。

I層～耕地整理による盛土で多くのボラを含む灰褐色土。上層が耕作土である。

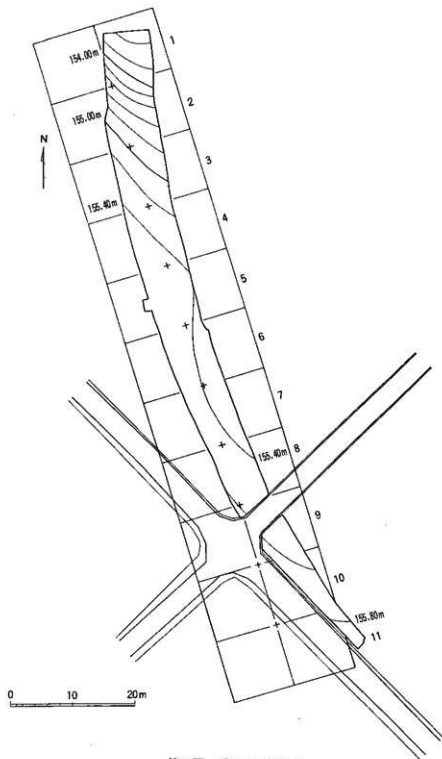
II層～ボラを若干含む黒色土層。下層ほどボラの量が多くなる。

III層～ボラを多く含む黒褐色土層。

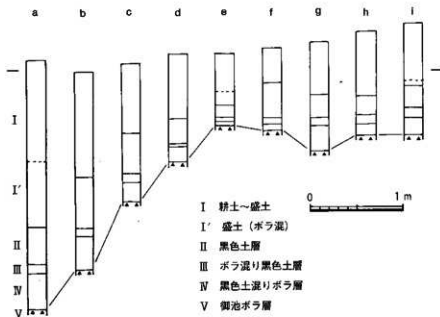
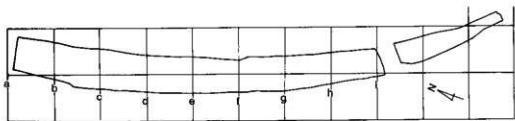
IV層～御池ボラ層。

遺物はI～III層で出土するがII・III層がプライマリーな包含層である。II層で最も多く遺物を出土する。

調査区の標高は中央部で155.4m、北側の台地先端部で153.6mを測り北側に向かって緩やかに傾斜している。層序からも中央付近でI層の厚さが約40cm、IV層までの深さが約90cm、北端でI層の厚さが約180cm、IV層までの深さが約260cmを測りその傾向が見られる。さらに盛土の厚さを見ると北側の丘陵先端ではかなりの盛土が行われていることが耕地整理の状況がうかがえる。



第4図 グリッド配置図



第5図 土層図

第3章 調査の記録

調査の結果、土坑10数基、掘建柱建物5～6棟、溝状遺構5条等の遺構と縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器、陶磁器、鉄釘等の遺物が検出された。

第1節 縄文時代の遺構と遺物

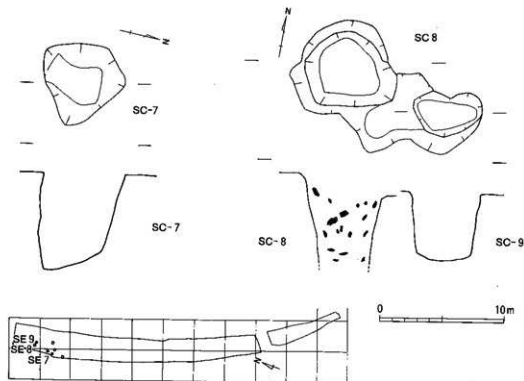
縄文時代の遺構・遺物は調査区の北側、2・3区を中心に御池ボラ層上位で検出された。

遺構 (第6回)

明確な遺構の検出はできなかったが、2区近くで検出された円形から楕円形の土坑3基が縄文時代の遺構と思われる。

SC-7は検出面の径65cm×70cm、深さ60cm～80cmの台形状をした土坑である。

SC-8は検出面の径75cm×60cm、深さ80cm以上の円形の土坑である。床面までの深さがかなり



第6図 SC7・SC8・SC9遺構実測図

あり途中で検出を中止したが、埋土全体に炭化物が多量に含んでいる。

SC-9はSC-8に隣接しており、検出面の径55cm×30cm、深さ約60cmの楕円形の土壌である。

SC-8とSC-9の周辺には2m四方に炭化物を含む埋土が見られた。

そのほかにも、3基の南側に同規模のピットが2～3基見られる。同様の遺構と思われる。

遺物（第8図～第10図）

縄文時代の遺物は2・3区を中心に御池ボラ層上位で後期以降の土器等が出土している。また、溝状遺構の埋土からも数点の縄文土器が出土している。

1～25鉢形土器の口縁部および口縁部近くの破片である。1～9は口縁部を肥圧させ拡張した部分を文様帯にしている。

1は内外面とも貝殻条痕のあとナデ調整、口唇部にナデ調整が見られる。文様帯にはタテ方向の連続刺突文が施される。

2は内外面ともナデ調整で、文様帯にはヘラ状工具による短かめの連続沈線が施される。

3は内外面とも貝殻条痕調整で口縁部に刺突したのち凹線が施される。

4は内外面ともに貝殻条痕調整で、幅広い文様帯には端部を刺突した凹線が2条に施され、その下位にはヨコ方向の連続貝殻腹縁文が施される。

5は内外面ともナデ調整、幅広い文様帯にはタテ方向の連続刺突文が見られる。

6は内外面ともナデ調整、口縁部外面にタテ方向の連続刺突文が見られる。

7は内外面ともにナデ調整で、外面にはヘラ状工具による凹線が施され、さらに口唇部との間にはヘラ状工具による連続押圧文が施される。

8は外面にナデ調整、内面には貝殻条痕のあとに一部ナデ調整、口唇部にナデ調整が施される。外面にはヨコ方向と斜め方向の幅5mm程の凹線と口唇部との間に斜め方向の工具による連続刺突文が施される。

9は外面がナデ調整、内面が貝殻条痕調整で口唇部と下位にはあとでナデ調整を行う。文様帯には施文は見られない。

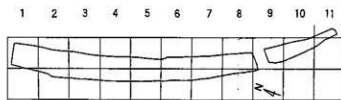
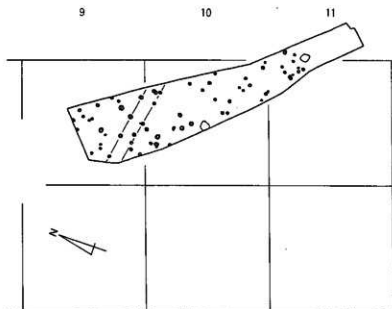
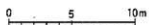
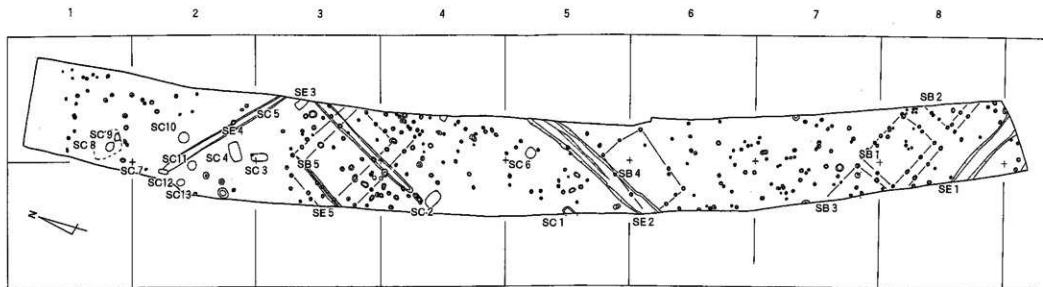
10～13は口縁部を大きく外反させる。

10は外面から口唇部にかけてナデ調整、内面が貝殻条痕調整で、口縁部にヨコ、斜め方向の貝殻腹縁による刺突文、口縁部の下にヨコ方向の貝殻腹縁による刺突文が見られる。

11は外面に工具によるナデ調整、内面に貝殻条痕のあとナデ調整、口唇部にナデ調整が見られる。

12は内外面とも貝殻条痕調整で口縁部下部に斜め方向の連続貝殻腹縁刺突文が施される。

13は内外面ともに貝殻条痕調整で外面下位には長めの斜め方向の貝殻腹縁による刺突文が施される。



第7図 遺構分布図

14は口縁が「く」の字に屈曲する波状口縁。内外面ともナデ調整で、波状口縁頂部内面の口唇部近くに斜め方向の連続貝殻縁刺突文、外面にも斜め方向の連続貝殻縁刺突文が二条に施される。

15は口縁部がやや外傾する波状口縁。外面にナデ調整、内面に貝殻条痕調整で、口唇部には幅5mm程の凹線が施される。外面には口縁部上部に「C」状の幅5mm程の凹線が施されその上下にタテ方向の連点文が施される。

16は口縁部が直立する。内外面ともにナデ調整で、外面には波状の沈線文が施され、中に斜め方向の貝殻刺突文が施される。

17は口縁部が直立する。内外面ともナデ調整で、外面にタテ方向と斜め方向に幅5mmほどの凹線が施される。

18は胴部片。外面にナデ調整、内面に貝殻条痕のあとにナデ調整が施されており、外面に幅5mm程の凹線が2条見られる。

19は口縁部が「T」字状に肥厚し、口縁部上部に2条の細い沈線とタテ方向の連続刻み目が見られる。内外面ともナデ調整である。

20は口縁部がやや外反し、口唇部にコブ状の突起が貼りつく。内外面ともに貝殻条痕調整で、外面には長さ2cmほどの斜め方向の貝殻腹による連続刺突文が施される。

21は口縁部がやや外傾する。外面に貝殻条痕のあとに一部ナデ調整、内面に貝殻条痕調整、口唇部にナデ調整が見られる。外面には口唇部上位に長さ5mmほどの、さらにその1cmほど下に長めの斜め方向の貝殻腹による連続刺突文が施される。

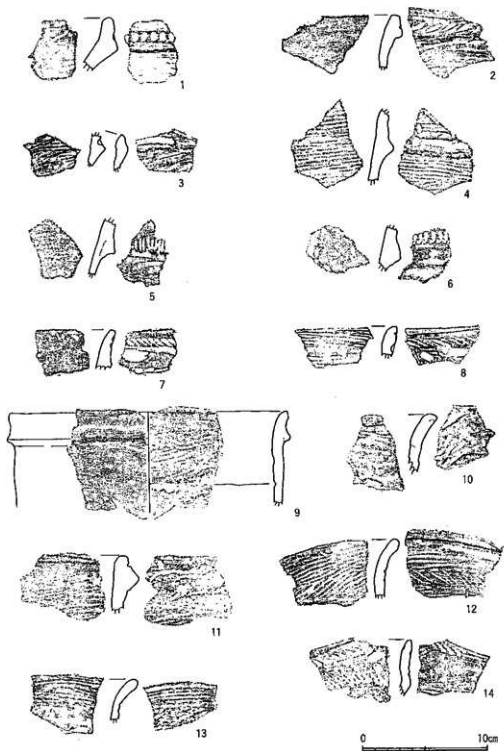
22は口縁部端部がやや肥厚する。内外面ともに貝殻条痕調整で、外面下部に貝殻腹による連続刺突文の一部が見られる。

23は口縁部端部がやや肥厚する。内外面とも貝殻条痕調整が見られる。

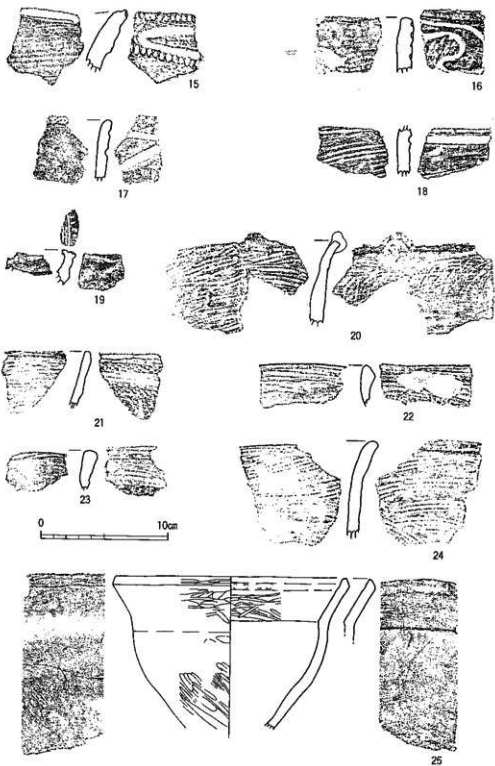
24は口縁部が外反する。外面に貝殻条痕調整、内面に貝殻条痕のあとに一部ナデ調整、口唇部にナデ調整が見られる。

25は頸部内面に稜を有し口縁部が外傾する。口縁部周囲で約4分の1が残存しており推定口径18.4cmを測る。内外面ともミガキ調整が施されている。口縁部内面には指押えの跡が残る。

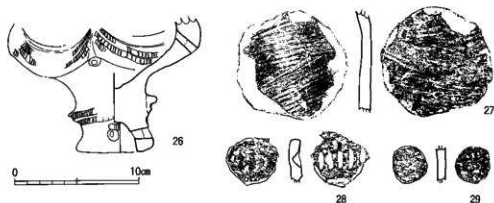
26は脚台付浅鉢。浅鉢部分は波状口縁で4か所に波頂部がありそれぞれに斜めの円形穿孔が見られる。(3か所残存)。波頂部はかなりの厚手である。口縁部には半竹管による連続押圧文が施される。基本的には2条の押圧文であるが波頂の左右に短かめの押圧文が見られる。脚台部には中央部に貼付突帯が巡り突帯とその下のつけねに2条の半竹管による連続押圧文が施される。連続押圧文の下部には円形の透かしが4か所に穿たれている。調整はほとんどがナデ調整で、特に浅鉢部分の内面は板状工具による強いナデが施される。また、中央部に黒色の箇所が見られる。器高11-12cm、口径15-16cm、底径約6cmを測る。



第8圖 縄文土器実測図(1)



第9圖 縄文土器実測圖(2)



第10図 縄文土器実測図(3)

27～29は縄文土器片を利用した土製円盤である。

27は内外面とも貝殻条痕調整の胴部片を利用している。径8.7cmを測る。

28はタテ方向の連続刺突文とその下にヨコ方向の沈線を施した口縁部片を利用している。径4.3～3.8cmを測る。

29は風化が著しく調整不明の胴部片を利用している。径は3.0～2.8cmを測る。

第2節 弥生時代の遺構と遺物

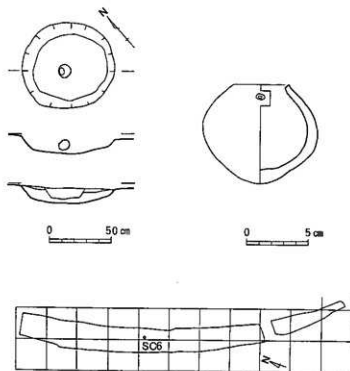
弥生時代の遺物は壺、甕、高坏、鉢などの破片が多量に出土している。遺構については土壌、掘建柱建物など可能性のある遺構も検出されているが時代の判別は難しい。

遺構

この時期と判別できる遺構は土壌1基がある。

SC-6 (第11図)

5区の中央に所在するレンズ状の握り込みを持つ円形土壌である。径70～75cm、検出面からの深さ15cmを測る。土壌中央のほぼ床面には小型の無頸壺が完形で出土した。



第11図 SC6遺構・遺物実測図

遺物

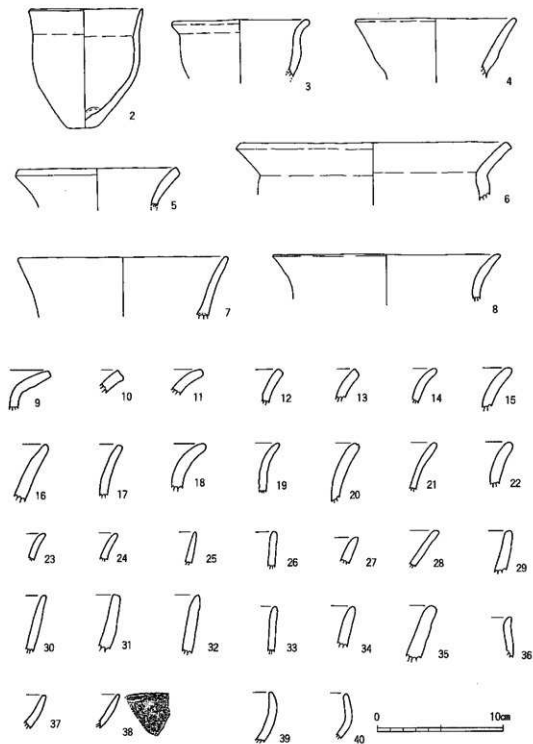
壺・甕・鉢・（第12図）

1はSC-6出土の球形で無頸の小型壺である。胴部中央に最大径を持ち底部は尖り気味の丸底を呈する。口縁部に穿孔が1か所あり対面に穿孔途中のものがある。器高8.0cm、口径4.5cm、最大径9.2cmを測る。

2は小型の甕形土器。底部は平底で胴部最大径と口縁部最大径があまりかわらず頸部内面に稜をもちわずかに外反する口縁がつく。完形品で器高9.6cm、口径9.0cm、底径2.0cmを測る。調整は内外面ともナデ調整である。

3～4は壺、甕、鉢の口縁部片である。

3は胴部から口縁部片。碗状の胴部に外反する短い口縁部がつく。6分の1程度が残存するが推定口径12.2cmを測る。内外面ともナデ調整である。鉢形土器と思われる。



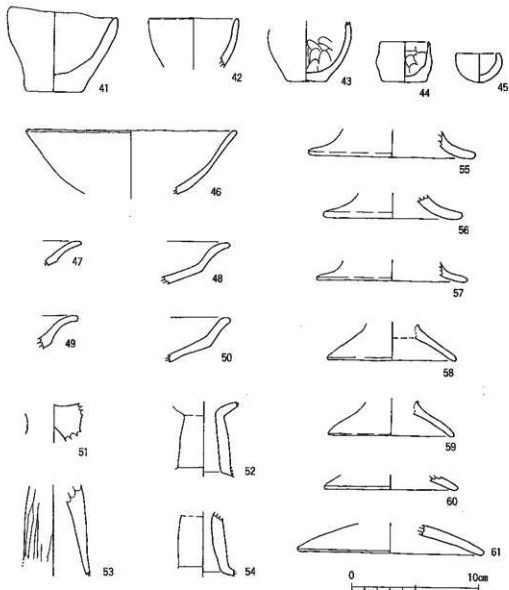
第12图 弥生土器实测图(1)

4は「く」の字に外傾する口縁である。内外面ともナデ調整で推定口径12.8cmを測る。壺形土器の口縁と思われる。

5・8は大きく外反する壺の口縁部で、5は推定口径、8が8分の1ほど残存しており推定口径が18.0を測る。

6は「く」の字に外傾する口縁で6分の1ほど残存しており推定口径21.1cmを測る。

7はわずかに外傾する長目の口縁で9分の1ほど残存しており推定口径21.2cmを測る。下位は粘土の継ぎ目である。



第13図 弥生土器実測図(2)

9～24は外反する口縁部、25～35は直立気味～わずかに外傾する口縁、37～40は内湾気味の口縁部である。38の口唇部にヨコ方向に沈線が見られる。

ミニチュア土器 (第13図)

41～45はミニチュア土器である。

41は小型の椀状のミニチュア土器。底径4.6cmの平底の底部から口縁部に逆「八」の字に開く。器高6.8～6.1cm、口径8.9cmを測る。内外面ともナデ調整。

42は椀状のミニチュア土器の口縁部。口径7.2cmを測る。内外面ともナデ調整。

43は椀状のミニチュア土器。器高2.3cm、器幅3.7cm、口径3.6cmを測る。内外面ともナデ調整。

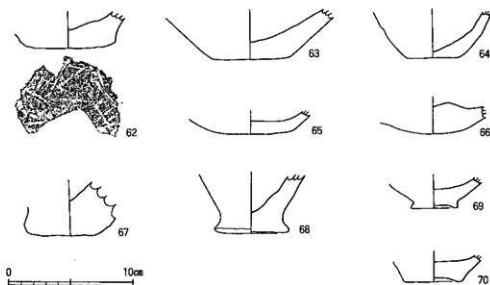
44はぐいのみ状のミニチュア土器。器高3.2cm、器幅4.5cm、口径4.0cm、底径3.6cmを測る。内外面ともナデ調整の工具痕が残り内面全面に指押さえ痕が見られる。口縁部は先細り粘土の継ぎ目が見られる。

45は口縁部を欠くミニチュア土器。球状の胴部に底径3.0cmの平底がつく。最大径は6.7cmを測る。内外面ともナデ調整で内面下位に指押さえ痕が見られる。

高坏 (第13図)

46～61は高坏の坏部、脚部、脚裾部である。

46は椀状に外反する坏部で口径17.0cmを測る。内外面ともナデ調整であるが外面下位ではミ



第14図 弥生土器実測図(3)

ガキのあとナデ調整が見られる。

47-50は坏部口縁部片でいずれも坏部中位で稜を持ち大きく外反する口縁部である。

51-54は脚部である。

51は坏部と脚部のつけね部分である。

52・54は柱状の脚部で裾部には屈曲部をもって広がる。52はややふくらみを持つ。いずれも詰め込み式の坏部が付く。調整はいずれも外面がていねいなナデ、内面が粗いナデ調整である。

53は柱状の脚部でそのまま裾部に関くと思われる。外面はミガキのあとナデ調整が施されている。

55-61は脚裾部である。55-57は裾部端が「ハ」の字に外反する。58-61は裾部端が内湾する。

底部 (第14図)

62は網代痕の見られる平底である。

63・64は平底で64は丸みのある壺の底部と思われる。

65・66はやや平底の痕跡が残る丸底である。66はかなりの厚みを有する。

67-70はあげ底に類する底部である。68の底部には板状工具によるナデ痕が残る。

刻み目突帯付き甕 (第15図)

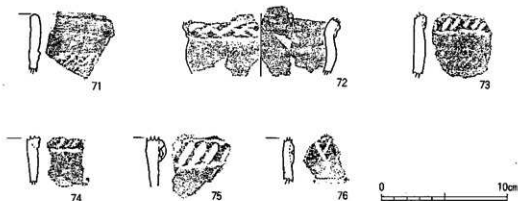
71-75は刻み目突帯を有する甕の口縁部および胴部片である。

73-74-75は刻み目の中に布目痕が見られる。布を巻いた工具を斜めに押圧して刻み目を施したと思われる。

71は沈線状の斜めの刻み目が施されている。

72は凹線状の、75は沈線状の「X」状の刻み目が施される。

71・72・73・75の外突帯下にはススの付着が見られる。



第15図 弥生土器実測図(4)

第3節 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺物は甕、坏などの破片が多量に出土している。遺構については土壇、掘立柱建物など可能性のある遺構も検出されているが時代の判別は難しい。

遺物 (第16図)

7区や9区、溝状遺構など須恵器の散布が見られるが出土量は少ない。

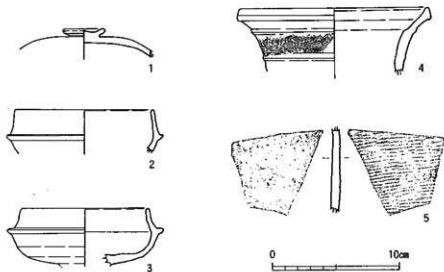
1は坏蓋で天井部みの破片である。平扁なつまみを有する。鈕径は約3.4cmを測る。

2・3は坏身片。2は坏部の立ち上がりが約2.0cmと長くほぼ直立する。受部は短い。推定口径約11cm、推定受部径約12.4cmを測る。

3は、坏部の立ち上がりが約1.7cmと比較的長く、内傾する。推定口径約10cm、推定受部径約12.4cm、器高約4.4cmを測る。底部に下方にのびそうなえりがみられることから高坏の坏部とも考えられる。

4は、壺か甕の口縁部片と思われる。「八」の字に大きくひろく口縁部で櫛波状文が施されている。推定口径14.6cmを測る。

5は胴部片で外面に平行叩き施されている。器厚は薄手である。



第16図 須恵器実測図

第4節 古代～中世の遺構と遺物

古代～中世の時期に比定される遺構は柱穴群および掘建柱建物跡、土塼、溝状遺構などがある。しかし、この中には時期を判別し難い遺構も見られた。

また、遺物は3区より南の地区で上師器皿や陶磁器類が見られる。

遺構

遺構は3区から以南の地区に分布する。全体で300基を超える柱穴が検出され、3棟ほどの掘建柱建物跡が確認された。

掘建柱建物跡 (SB)

SB-1 (第17図)

3区に分布する掘建柱建物跡でSB-3とは主軸方向で約90°切り合う。主軸をN-65°-Wを示す。2間×4間の建物で桁行660cm、梁行385cmを測る。北東角の柱穴は調査区外に外れる。北・西・南の3面に軒あるいは塼とおもわれる柱穴例が見られる。

SB-2 (第18図)

5区と6区にかけて分布する掘建柱建物跡でBS-2と切り合う。主軸方向はSB-2がやや北に向く。主軸をN-35°-Eを示す。2間×3間の建物で桁行575cm、梁行365cmを測る。北西角の柱穴は調査区外に外れる。BS-1とは主軸がおおよそ90°振れる。

SB-3 (第18図)

8区に分布する掘建柱建物跡でBS-1と主軸方向がほぼ同一である。主軸をN-65°-Wを示す。2間×4間の建物で桁行635cm、梁行345cmを測る。建物内にも柱穴が並び総柱列も考えられる。南面に軒あるいは塼と思われる柱穴列が見られる。南西角のボラ層上面(遺構確認面)から約20cm上の黒色土中で40cm四方の焼土塊が検出された。カマドの可能性も考えられる。北東角の柱穴は調査区外に外れる。SB-3の西にも柱穴が一部並ぶことから建物跡が考えられる。

溝状遺構 (SE)

溝状遺構は2区から8区にかけて5条が検出された。主軸がN-65°-Wの方向に掘られた溝(東西溝)とN-30°-35°-Eの方向に掘られた溝(南北溝)がある。

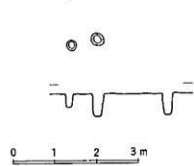
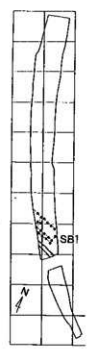
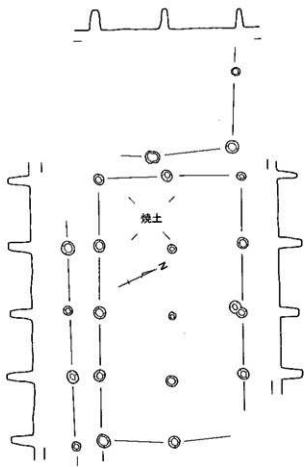
SE-1 (第7図)

8区で検出された東西方向の溝状遺構。幅120cm～150cm、検出面からの深さ約40cmを測る逆台形状の溝状遺構。掘建柱建物のBS-3と同じ方向である。

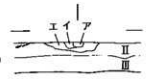
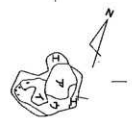
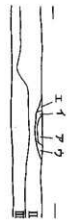
SE-2 (第7図)

5区から6区にかけて検出された南北方向の溝状遺構。幅140cm、検出面からの深さ約55cmを測る逆台形状の溝状遺構。

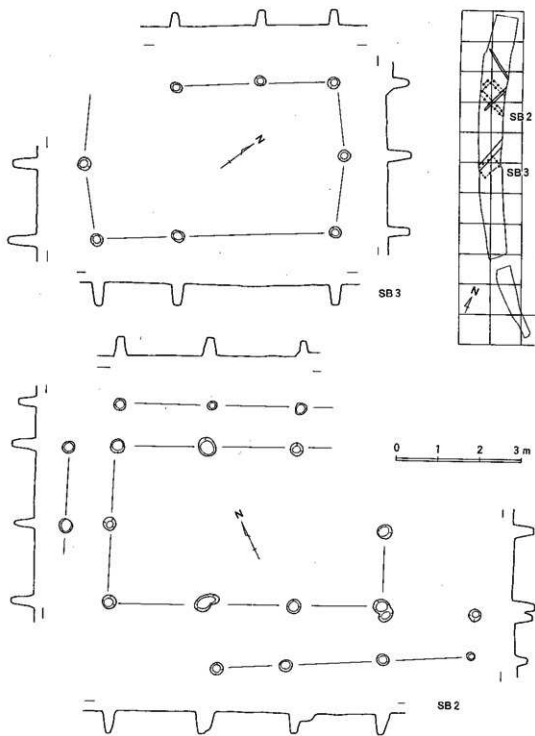
その他にも2区～3区にかけて南北溝のSE3・4、東西溝のSE5が検出されている。



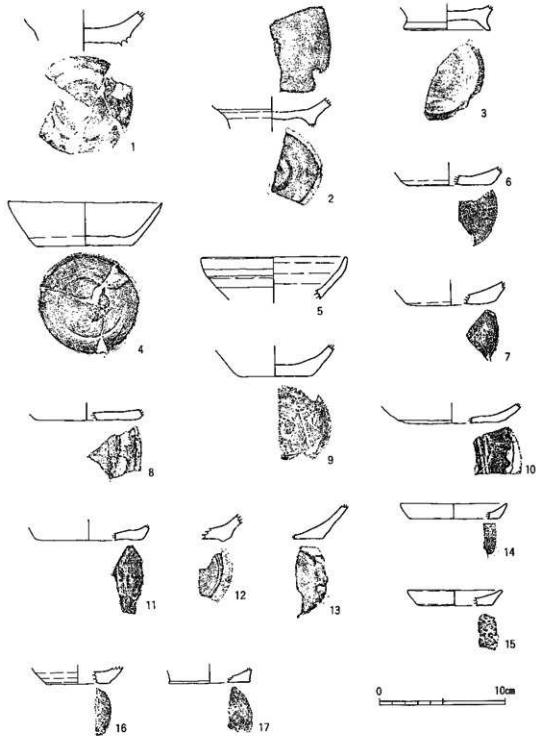
- ア…焼土 (赤褐色土)
- イ…褐色土・粘土・焼土を多く含む
- ウ…粘土を多く含む黒色土 (焼土は少ない)
- エ…黒色土 (粘土、焼土を少し含む)



第17図 SB1遺構実測図



第18图 SB2·SB3遺構実測図



第19图 土器器実測图

遺物

遺物には坏・碗などの土師器、青磁などの陶磁器が出土している。

土師器

高台付碗（第19図）

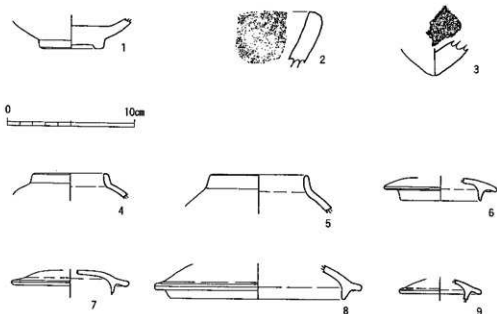
- 1は高台部分を欠損するが高台の継ぎ目が認められる。内外面ともナデ調整である。
- 2は碗部内面に布の痕跡が見られる。高台内面はナデ調整である。
- 3は推定底径約7cmを測る。内外面ともハケ状の調整が見られる。

坏（第19図）

- 4は唯一完形の坏である。底部は糸切り底で口唇部の向かって大きく開く。内外面ともナデ調整が施されている。口径12.3cm、器高3.5cm、底径7.7cmを測る。
- 5は推定口径11.4cmの坏である。内外面ともナデ調整である。
- 6～8・12・13はナデ調整の坏。
- 9～11はヘラ切の底部。
- 14～17は小型の皿である。いずれもナデ調整が施されている。

磁器（第20図）

- 1は青磁碗である。推定底径4.7cmを測る。



第20図 陶磁器実測図

布痕土器 (第20図)

2・3は布痕土器と思われる。2は口縁部、3は尖底の低部である。いずれも風化が著しく布目の痕跡は余り認められない。

第5節 その他の時代と時期不明な遺構と遺物

遺構

土壌 (SC)

2区～5区にかけて土壌10数基が検出された。明確な時期については判断し難い。弥生時代ないしは古墳時代の可能性は残る。

SC-1

5区に分布する土壌。主軸をN-32°-Eを示す。長軸151cm、短軸82cm、検出面からの深さ34cmを測る長方形の土壌。土壌内から鉄釘片7本が出土したことから木棺を埋めた土壌層が考えられる。

鉄釘は径3～4mm程度の太さの平釘で1～4は頭部が残る。5は頭部を欠く。6は下位、7は中位の破片である。1・5・6は途中から「J」の字に屈曲する。5・7には木質が残存する。釘の長さはほぼ完形品と思われる1でおおよそ6.5cm、5でおおよそ7cm以上を測る。

SC-2

2区に分布する土壌。主軸をN-60°-Wを示す。長軸145cm、短軸90cm、検出面からの深さ28cmを測る長方形の土壌。東側に幅25cmほどの段を有する。

SC-3

2区と3区の境に分布する土壌。主軸をN-22°-Wを示す。長軸110cm、短軸70cm、検出面からの深さ23cmを測る長方形の土壌。床面中央に幅35cm、深さ15cmほどのピットが見られる。埋土に土壌下位との差は確認されなかったことから中央に掘り込みを持つ土壌と思われる。

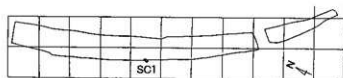
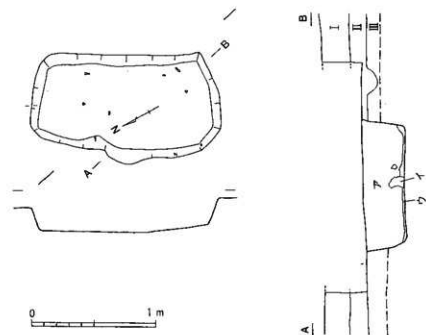
SC-4

4区に分布する土壌。主軸をN-52°-Eを示す。長軸156cm、短軸80cm、検出面からの深さ22cmを測る長方形の土壌。床面中央に幅60cm、深さ20cmほどの掘り込みがあり両脇にピットが見られる。埋土に土壌との差は確認されなかったことから中央に掘り込みを持つ土壌と思われる。

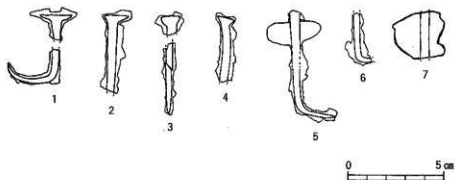
遺物

陶器 (第20図)

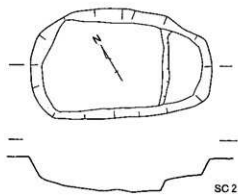
4～9は近世の陶器と思われる。4・5が壺の口縁部、6～9が反りの付く蓋である。



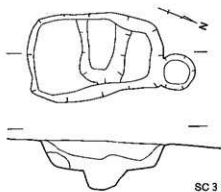
ア…ボラ粒を少し含む黒色土
 イ…ボラブロック
 ウ…ボラを多く含む黒色土



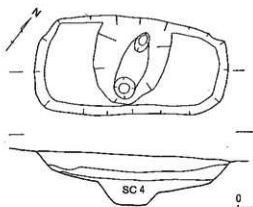
第21図 SC1 遺構・遺物実測図



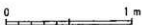
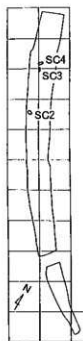
SC 2



SC 3



SC 4



第22圖 SC2·SC3·SC4遺構実測図

第4章 まとめ

永山原遺跡の発掘調査がおこなわれた昭和60年当時、高城町内での発掘調査はほとんど行われておらず、町内の遺跡としては、前方後円墳3基をはじめ円墳・地下式横穴墓・箱式石棺などからなる大井手の牧ノ原古墳をはじめ石山、有水にも分布する高城古墳、地下式板石積石室墓の西隈地である香禪寺遺跡、中世山城の月山日和城跡など数遺跡しか知られていなかった。その後、石山の城ヶ尾遺跡、細井の細井地区遺跡など近年の諸開発に伴い大掛かりな発掘調査が行われており徐々に高城町の考古学資料も増加してきた。

永山原遺跡の調査は道路幅10cmと制限された範囲での調査に加えて、十分な調査期間の確保が困難であったことから十分な調査とは言い難い。時代毎にまとめてみた。

縄文時代

当遺跡の北に所在する城ヶ尾遺跡では前期の管畑式土器、後期の市来式土器、草野式土器、晩期の黒色磨研土器、刻日突帯文土器などが確認されている。

当遺跡では御池ボラ層上での遺構・遺物の検出であった。御池ボラ層下、及びアカホヤ火山灰層下での遺構・遺物の確認は時間的な問題から行わなかった。

検出された遺構は円形的大型ピット風の土壌が数基検出された。遺構の性格は不明であるが堀土中および周辺には炭化材が多く見られた。

建物は土器類がほとんどで石器類は見当たらない。出土土器の大半は後期の貝殻文系の市来式土器である。とくに装飾を施した台付浅鉢は市来式土器の最盛期の土器である。

弥生時代

城ヶ尾遺跡では後期の花びら形住居跡3軒と土壌数基が検出されている。

当遺跡での遺構は無頸の小型を伴う円形土壌1基しか検出されていない。出土遺物には小型の甕やミニチュア土器などの小型の土器が目立つ。大型の甕類は破片でしか見られない。絡縄突帯を持つ甕の胴部片や高坏の各部の破片などから弥生時代終末から古墳時代初頭の時期があらはまる。

古墳時代

当遺跡の南には6世紀に築造された牧ノ原古墳群が分布するが、当遺跡では古墳時代の遺構は確認されず、遺物のみが出土している。出土遺物はすべて須恵器であるが、直接土壌とは関連しない。遺物は須恵器坏身が5世紀末～6世紀初頭の時期にあたり6世紀代を中心とする遺物と思われる。

古代～中世

城ヶ尾遺跡では平安時代の2間×3間の掘立柱建物跡1棟が検出され、ヘラ切り底の土器器坏、高台付きの須恵器椀、布直七器等の遺物を出土している。また、等遺跡から西へ行った丘

陵先端には中世山城の日和城が所在する。

当遺跡の中心となる時期である。掘立柱建物群、柱穴群、溝状遺構などを調査区全体で検出している。掘立柱建物跡と溝状遺構の主軸方向はほぼ東西方向かほぼ南北方向にあり逐て替えがあったにせよ両遺跡が伴設されていたことを物語り、大規模な建物群の存在が考えられる。

これらの遺構の時期については、出土遺物がヘラ切り底の土師器坏、高台付き腕などが主体となることや、風化が著しく布目は確認できないが形状等から判断した布痕土器も見られることから平安時代を中心とする時期と思われる。

その他の時期

数基検出された時期不明の長方形プランの土壇遺物は伴わないが周辺での土器片の散布状況や各時代の出土土器量などから弥生時代の遺構と思われる。なお、SC1からは鉄釘が7～8本出土していることから木棺直葬の土壇墓と考えられる。土壇墓群の可能性もある。

永山原遺跡は当初、以前のは場整備事業によって包含層は削平されているのではないかと懸念されていた。しかし、調査の結果、これだけの量の遺構・遺物が検出されたことから周辺地域に遺跡の広がりが見込まれ良好に保存されている状況も確認できた。今後、諸開発に伴い十分な調査が行われることを希望する。



永山原遺跡全景（表土剥ぎ時）



調査区北端（土層堆積状況）



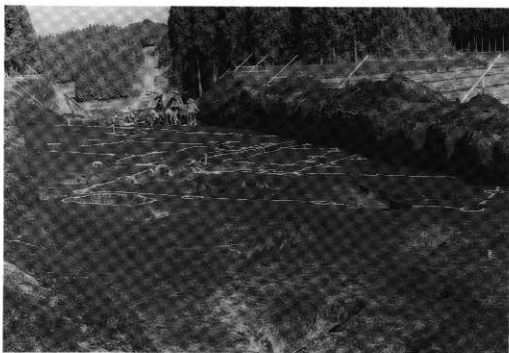
遺構確認状況（調査区南）



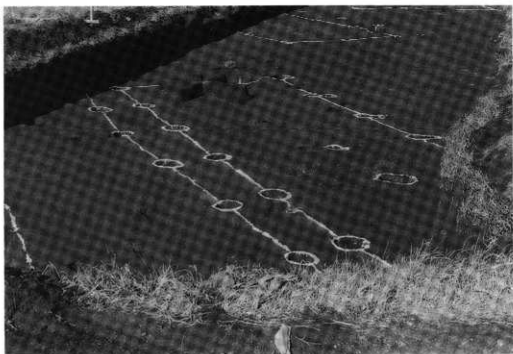
遺構確認状況（調査区北）



遺構検出状況（調査区南）



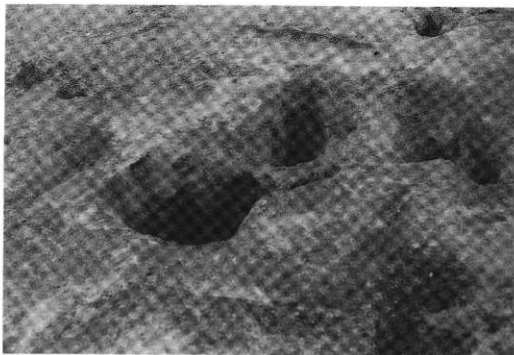
遺構検出状況（調査区北）



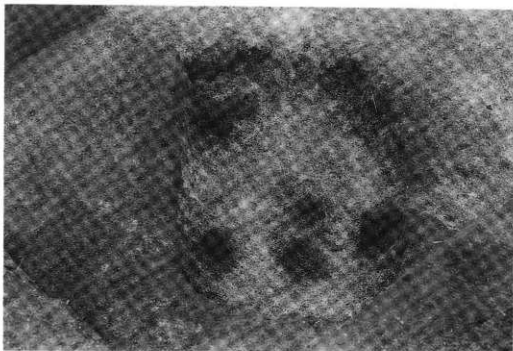
SB-3検出状況



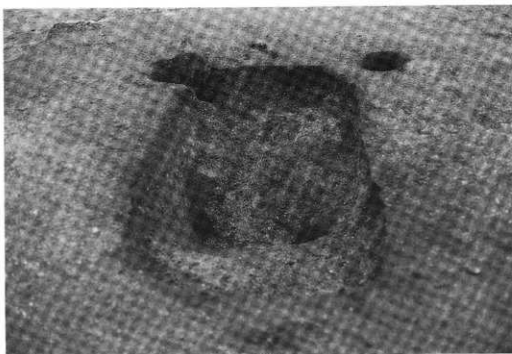
SB-2検出状況



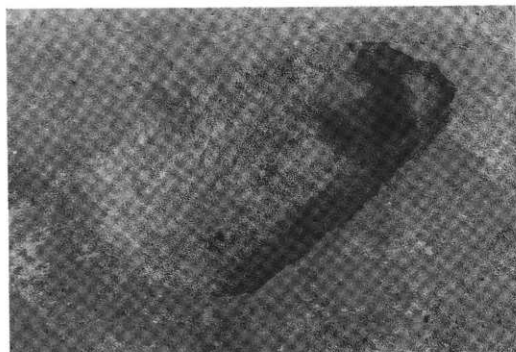
SC-8・SC-9 検出状況



SC-1 検出状況



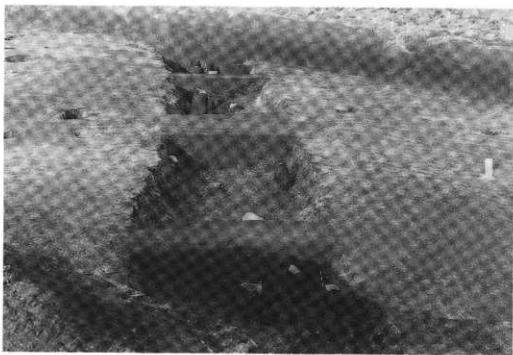
SC-4 検出状況



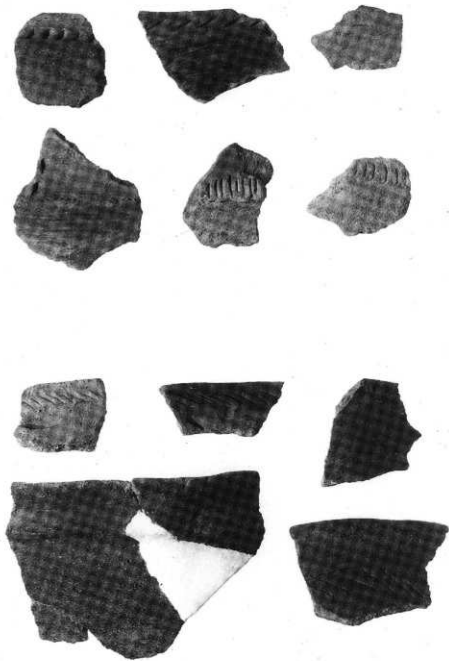
SC-2 検出状況



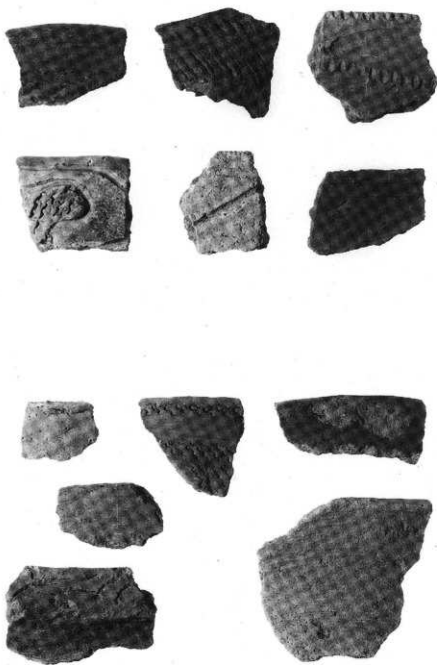
SE-1 検出状況



SE-2 検出状況



縄文土器(1)



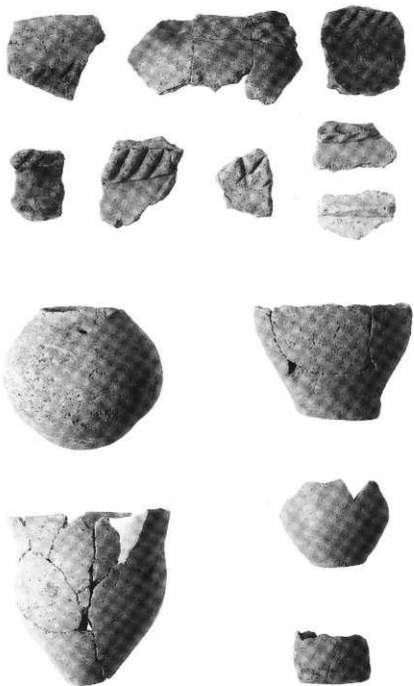
縄文土器(2)



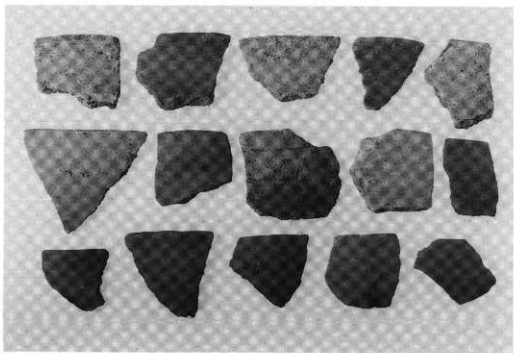
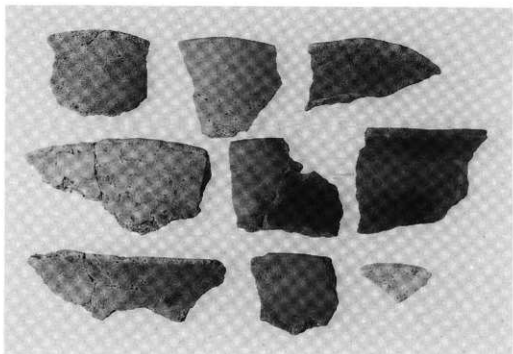
繩文土器(3)



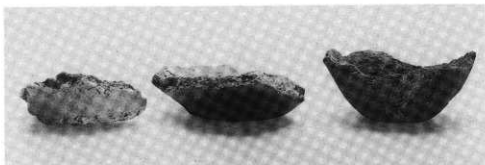
縄文土器(4)



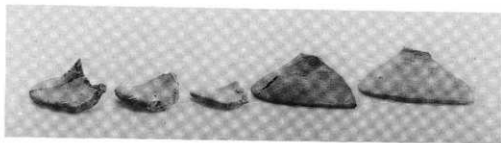
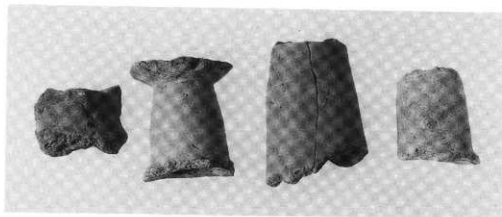
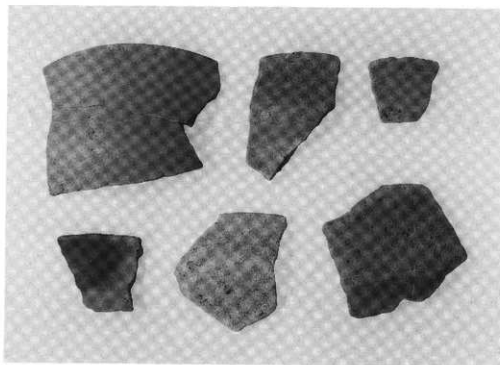
弥生土器(1)



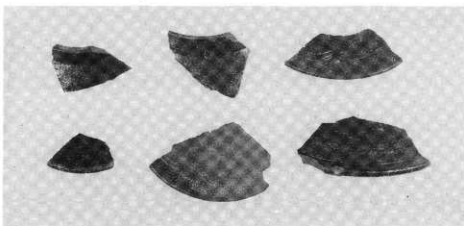
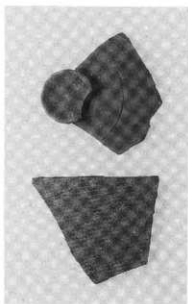
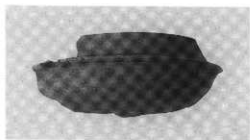
弥生土器(2)



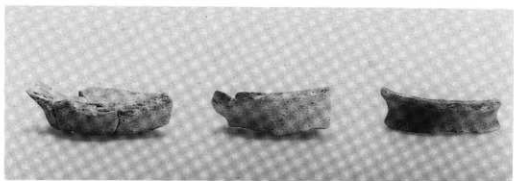
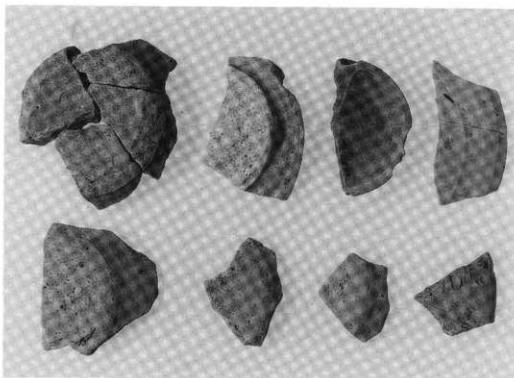
弥生土器(3)



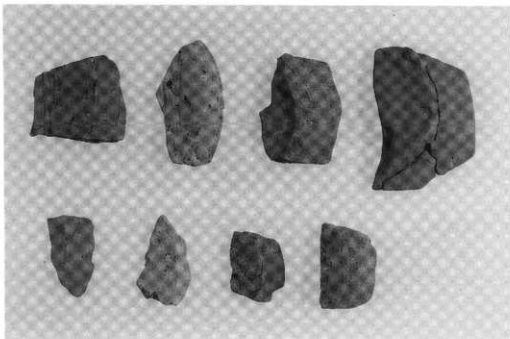
弥生土器(4)



須惠器・土師器坏・陶磁器



土器高台付碗・土器器坏(1)



土師器坏(2)

永山原遺跡

霧島南部2期地区広域農道建設工事
に伴う発掘調査報告書

1994. 3. 31

編集 宮崎県教育庁文化課
〒880 宮崎市橘通東1-9-10 TEL0985247250
発行 宮崎県教育委員会
印刷 都 都 城 印 刷
都城市早鈴町1618 TEL0986224392(0)
